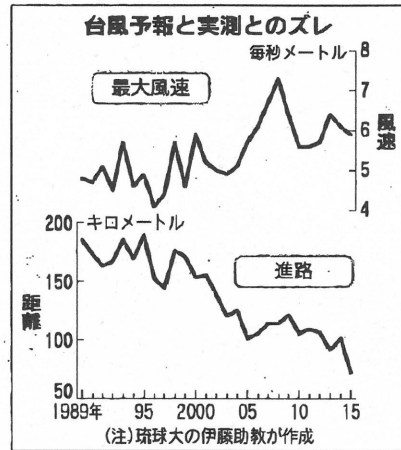




日本列島を襲う台風の予報が迷走している。進路については近年精度が高まっているものの、深刻な被害に陥る最大風速は逆に誤差が拡大しているからだ。台風が発達する海上の観測データが少ないことが主要因。台風の性質が変わってきた可能性もあり、最先端のスーパーコンピュータを使って精度を改善する研究が熱を帯びている。

台風の最大風速予報



スパコン「京」で精度改善

から、経験を重ねた予報官は72キロにまで小さくなった」という。広がった。最悪だった08年のように急発達する台風が増えたため、現行の計算モデルが通用しない場合が目立つという見方もある。とはいえ、研究者も手をこまぬいてはいない。スパコン「京」を使ったシミュレーションで成果が上がってきた。

ただ、わずかな進路のずれのため、最大風速の予測がはずれることがある。例として、2010年に沖縄県を直撃した台風18号。気象庁は、風速を左右する中心気圧がどうなっているか、本島では最大瞬間風速が毎秒60以上の猛烈な風になった。徳津教授は「水の状態変化」として、陸上での実測の最大瞬間風速は約60キロにとまらなかつた。

予報と実測で20キロの差が出たのは瞬間値で極端だ。この20年ほどで最大風速の予報精度が少しも上がっていないのは事実だ。1日目の予報との平均誤差をみると、96年には約4倍だったのに、最近では約6倍に増えたため、現行の計算モデルが通用しない場合が目立つという見方もある。とはいえ、研究者も手をこまぬいてはいない。スパコン「京」を使ったシミュレーションで成果が上がってきた。

予報と実測で20キロの差が出たのは瞬間値で極端だ。この20年ほどで最大風速の予報精度が少しも上がっていないのは事実だ。1日目の予報との平均誤差をみると、96年には約4倍だったのに、最近では約6倍に増えたため、現行の計算モデルが通用しない場合が目立つという見方もある。とはいえ、研究者も手をこまぬいてはいない。スパコン「京」を使ったシミュレーションで成果が上がってきた。

予報と実測で20キロの差が出たのは瞬間値で極端だ。この20年ほどで最大風速の予報精度が少しも上がっていないのは事実だ。1日目の予報との平均誤差をみると、96年には約4倍だったのに、最近では約6倍に増えたため、現行の計算モデルが通用しない場合が目立つという見方もある。とはいえ、研究者も手をこまぬいてはいない。スパコン「京」を使ったシミュレーションで成果が上がってきた。

予報と実測で20キロの差が出たのは瞬間値で極端だ。この20年ほどで最大風速の予報精度が少しも上がっていないのは事実だ。1日目の予報との平均誤差をみると、96年には約4倍だったのに、最近では約6倍に増えたため、現行の計算モデルが通用しない場合が目立つという見方もある。とはいえ、研究者も手をこまぬいてはいない。スパコン「京」を使ったシミュレーションで成果が上がってきた。

予報と実測で20キロの差が出たのは瞬間値で極端だ。この20年ほどで最大風速の予報精度が少しも上がっていないのは事実だ。1日目の予報との平均誤差をみると、96年には約4倍だったのに、最近では約6倍に増えたため、現行の計算モデルが通用しない場合が目立つという見方もある。とはいえ、研究者も手をこまぬいてはいない。スパコン「京」を使ったシミュレーションで成果が上がってきた。

予報と実測で20キロの差が出たのは瞬間値で極端だ。この20年ほどで最大風速の予報精度が少しも上がっていないのは事実だ。1日目の予報との平均誤差をみると、96年には約4倍だったのに、最近では約6倍に増えたため、現行の計算モデルが通用しない場合が目立つという見方もある。とはいえ、研究者も手をこまぬいてはいない。スパコン「京」を使ったシミュレーションで成果が上がってきた。

予報と実測で20キロの差が出たのは瞬間値で極端だ。この20年ほどで最大風速の予報精度が少しも上がっていないのは事実だ。1日目の予報との平均誤差をみると、96年には約4倍だったのに、最近では約6倍に増えたため、現行の計算モデルが通用しない場合が目立つという見方もある。とはいえ、研究者も手をこまぬいてはいない。スパコン「京」を使ったシミュレーションで成果が上がってきた。

予報と実測で20キロの差が出たのは瞬間値で極端だ。この20年ほどで最大風速の予報精度が少しも上がっていないのは事実だ。1日目の予報との平均誤差をみると、96年には約4倍だったのに、最近では約6倍に増えたため、現行の計算モデルが通用しない場合が目立つという見方もある。とはいえ、研究者も手をこまぬいてはいない。スパコン「京」を使ったシミュレーションで成果が上がってきた。